

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：34420

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24700782

研究課題名(和文) 幼稚園・保育所における父親を対象にした子育て支援策の効果の検証

研究課題名(英文) Effects of child-rearing support services on fathers of children in preschool

研究代表者

田辺 昌吾 (Tanabe, Shogo)

四天王寺大学・教育学部・講師

研究者番号：00512831

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では父親が就学前保育施設とつながりをもつことの効果と課題を検討した。具体的には就学前保育施設を利用する父親および保育者へのインタビュー調査を実施した。その結果、父親が就学前保育施設とつながりをもつことが、「父親自身の楽しみ」「父子関係の深まり」「子どもを介した人間関係の広がり」につながっていた。一方、父親を主たる対象(当事者)とした支援を継続することの難しさや父親支援における男性保育者への期待なども明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This research examines the effects of preschool facilities on fathers of children in preschool and the issues that fathers have with them. For this purpose, this study conducted interviews with fathers and child-care specialists. The results of the interview analysis indicated that fathers who engage with their children's preschool experience more "paternal pleasure," "become more deeply involved with their child," and "build a lasting relationship with other children and their parents." However, it was also found that providing continuous support to fathers is difficult, and therefore, male child-care specialists could provide support to fathers in the future.

研究分野：幼児教育学

キーワード：父親 子育て支援 就学前保育施設 保護者支援の専門性 男性保育者

1. 研究開始当初の背景

1990年代後半以降、「父親の育児」が社会的に注目を集め、国の子育て支援施策において父親を対象にした支援策が徐々に展開されるようになってきた。国の施策と連動して、独自の父親支援策を展開する自治体やNPO、幼稚園や保育所も散見され、近年、増加傾向にあり、実践報告も行われている。

一方、これまで子育て支援に関する研究対象は主として母親であった。父親を対象とした研究では、父親の育児参加を規定する要因を検討した研究や父親が育児参加することによる子どもや母親、父親自身に及ぼす影響を検討した研究等が見られるが、子育て支援主体が行う父親支援の方向性について言及した研究はわずかに散見されるだけである。

父親のための支援の実施主体として大きな役割を担うことが期待されるのは、幼稚園や保育所、地域子育て支援拠点といった就学前保育施設である。父親が日々の生活の中で継続して接点をもちやすい施設であるからである。各施設において、これまで取り込まれてきた子育て支援策には一定の蓄積があり、今後もさまざまな支援策を展開していくことが望まれている現状から、今後、幼稚園や保育所が取り組むべき父親支援の方向性を検討するためには、父親が各施設とつながりをもつことにどのような効果があるのかを明らかにする必要がある。また、子育て支援において重視されている保護者と保育者との「連携」という視点に立てば、父親支援に対する保育者の意識や専門性についても検討し、父親と保育者双方の視点から父親支援について検討する必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、社会的に注目を集めている「父親の育児」に焦点をあて、父親がよりよい状態で育児を行うためには、就学前保育施設において、どのような子育て支援策が必要であるのかを明らかにすることを目的とする。具体的には、父親が就学前保育施設とつながりをもつことの効果と課題を検討し、さらに父親を支援する保育者の、父親支援に対する意識や専門性についても検討する。

3. 研究の方法

(1) 父親に対する効果的な子育て支援策について検討するために、研究代表者がこれまで実施してきた質問紙調査の結果を再解析し、本研究の方向性を精査した。

(2) 父親が就学前保育施設とつながりをもつことの効果と課題を検証するために、2回のインタビュー調査を実施した。1回目は地域子育て支援拠点施設で父親サークルを運営する3名の父親を対象にグループインタビューを実施した。それぞれの父親のもつ子ども数と年齢(学年 - 小=小学校、幼=幼稚園、保=保育所)は、A(3人:幼年長/幼年中

/2歳) B(2人:幼年長/3歳) C(2人:幼年少/1歳)であった。

2回目は幼稚園・保育所に通う子どもをもつ4名の父親を対象に個別インタビューを実施した。それぞれの父親のもつ子ども数と年齢(学年)は、D(1人:保1歳) E(3人:小4年生/小1年生/幼年中) F(3人:小1年生/幼年中/幼年中) G(2人:小3年生/保年長)であった。

(3) 父親支援に対する保育者の意識や専門性について検討するために、2回のインタビュー調査を実施した。1回目は父親支援に特化せず、広く保護者支援における保育者の専門性を検討するために8名の保育者を対象に個別インタビューを実施した。それぞれの保育者の現在の勤務先(幼保の別)、役職、保育経験年数は、M(幼、園長、13年) N(幼、園長、13年) O(幼、園長、30年) P(保、園長、29年) Q(幼、学年主任、12年) R(幼、学年主任、16年) S(幼、学年主任、10年) T(幼、学年主任、30年)であった。

2回目は父親支援において役割が期待されている男性保育者に焦点をあて、6名の男性保育者に個別インタビューを実施した。それぞれの保育者の現在の勤務先(幼保の別)、保育経験年数は、U(保、3年) V(保、20年) W(保、15年) X(保、16年) Y(保、13年) Z(幼、20年)であった。

4. 研究成果

(1) 質問紙調査データの再解析の結果、父親が他の父親と交流する機会が多いほど仕事面、心理面、身体面のウェルビーイングが高まること、育児経験者からの情報収集の機会が多いほど父親である自己の受容を高め、家庭面のウェルビーイングも高めるが、専門家からの情報収集の機会はウェルビーイングに直接的な影響を及ぼさないことが明らかとなった。この結果より、父親同士の交流の機会を提供する支援が必要であること、当事者性の高い支援が父親に有効に働くことから、専門家はできる限り当事者性を意識して情報提供などのかかわりをもつことが示唆された。

量的調査である本研究成果を踏まえ以下のインタビュー調査を実施し、質的側面から父親に対する子育て支援について検討を行った。

(2) 地域子育て支援拠点施設で父親サークルを運営する父親を対象に実施したインタビュー調査の結果について、父親がサークル活動に参加することの効果と課題について述べる。なお、本サークルでは概ね月1回程度、父親たちが中心となったイベントが実施されている。

父親がサークル活動に参加することの効果

まず『父親自身の楽しみ』があげられた。「全体的にパパサークルのいろいろなことを共有して、いろんな大きなイベントをやろうという流れがあって、あときはちょっとやって面白いかなという感じがあった」など、サークルでの活動が父親自身の楽しみになっており、運営を通して達成感や満足感も得られていることが窺われた。

また『母親(妻)のサポート』に関する内容も語られた。「ママに時間を与えるというのが(父親サークル運営の)一番の目的なので」など、母親(妻)のサポートを主たる目的にサークル運営が行われており、実際に父親だけで子どもを連れてイベントに参加し、母親(妻)に自由な時間を与えている様子も見受けられるとのことだった。

さらに『子どもとの関係の深まり』についての語りもみられた。「(サークルでの活動には)いろんな年齢の子がいるので、その中で自分の子どもがどうなるのかとか、平日なかなか子どもが幼稚園でどういうふうにいるのかとか、そういうのを見る機会がないので、(サークルで)他の子どもたちとどう接しているのかを見れるのはいいですね」など、家庭以外でのわが子の姿を見ることで子ども理解が進み、豊かな父子関係につながるきっかけとなることが窺われた。

父親サークルを運営していく上での課題

まず『父親同士の関係構築の難しさ』があげられた。(1)の結果より、父親が他の父親と交流する機会をもつことに効果があることが示されたことから、父親同士の関係構築の実際について問うたところ、「お母さんは結構よその子とかでもいいし、他のお母さんとかと結構おしゃべりしたりできるんですけども、多分お父さんはなかなかしにくい人間だと思うんですね。だから、ここに例えば月1回いて、同じ顔を合わせていたとしても、そこから次の壁を越えるのはやっぱり難しいところはありますね」と語られた。父親が集うのは休日に限定され、その限られた時間の中で他の父親と関係を構築するのは難しく、なんらかのきっかけ(支援者の働きかけ)の必要性が窺われた。

また『父親だけの運営の難しさ』があげられた。本サークルの主たる目的は「でもふれたように「母親(妻)のサポート」であり、そのためには父親だけで子どもを連れての参加が望ましい。しかし、「ママさんと一緒に参加というイベントになると(参加する父親が)どっと増えるんですけど、パパさん限定だと絞ると激減しますね。そのハードルはすごく高い」とのことで、父子での活動を中心にしたい思いはあっても現実には困難が伴っていることが示された。またサークルを運営している父親たちは、もっと父親が主体となってイベントの企画などを行いたいと思っているが、この父親たちも基本的には休日しかサークル活動はできず、どうしても拠

点施設職員(女性)のサポートがないとサークル運営が難しいとのことであった。「(父親サークルの運営は)自分たちでというよりも、もうスタッフさん主導なんですけれども、でもそうしていてももらわないと全然僕ら動けない」「スタッフさんあってのこの(父親の)会」などと語られた。父親たちの主体性を大切にしつつも、母親(妻)や施設職員と連携し、徐々に父親の輪を広げていくことが現実的であり、現実に即したサークル運営の重要性が示唆された。

さらに上記の『父親だけの運営の難しさ』とも関連するが、『サークル運営を担う父親の育成・継承の難しさ』があげられた。父親だけのサークル運営には限界があり、さらに「できれば次から次へと人が、(中心となる父親が)入れ替わるじゃないですけども、そうならないとダメなんじゃないかなと思うんですけどね。だから、新しい人にもうちょっと残ってほしいというのはある」「期待していたお父さんが引っ越したとか、お仕事の関係だとか。やっぱり次々といなくなる現状ではありますね」との語りがあった。組織を運営していくためにはいずれの組織であっても直面する課題ではあるが、「ここを利用されているのは未就園児の子がメインなので」というように、父親が地域子育て支援拠点と接点をもつ期間は限られており、母親と比してサークル運営を主体的に担おうとする父親は圧倒的に少ない現状では、サークルの維持・継承が難しいことが示された。だからこそ上記したように、母親(妻)や施設職員と連携し、現実に即した道を模索する必要性が示唆された。

(3) 幼稚園や保育所に通う子どもをもつ父親を対象に実施したインタビュー調査の結果について、父親が園とつながる具体的な機会、そのことの効果と課題について述べる。

父親が園とつながる具体的な機会

園や個人によって違いはあるものの、子どもの送迎時、園行事での協働、保護者会役員としての活動、父親の会での活動などがあげられた。本調査対象者の父親は比較的積極的に園とつながる機会をもとうとしていた。

父親が園とつながることの効果

(2)の調査でも示された『父親自身の楽しみ』があげられた。「(園での活動を通して)父親同士でつながることが単純に楽しい」「週末の土日にこの父親の会から派生した、特に仲の良い家族(父子)で青少年の家という所に合宿に行ってきたんですけど、楽しいですね」などの語りがあり、この父親は園で運営されている「父親の会」に積極的に参画し、その活動と、さらにはその活動を通してできた父親同士の関係を活かしてプライベートでも楽しみを得ている様子が語られた。また別の父親からも「(父親同士で企画

した取り組みをして)『やって楽しかったよ』
っていう声があって、また今度するときには
『やろう、やろう』というふうな声が出てい
た」という語りがあり、父親たちが自身の楽
しみとして取り組んでいる様子が窺われた。

また、これも(2)の調査でも示された『子
どもとの関係の深まり』があげられた。「い
ろんな行事に参加するっていうことは子ども
の園生活も見れるし、子どもたちからしたら、
あ、お父さん頑張っているなっていうふう
に見てくれているかなとか思ったり、お互
いを認められる。参加したら、今日これで面
白かったね、うん、本当あれ面白かったよ
っていう双方向の会話ができる」など、園行
事を介して、父子関係が深まっていく様子が
窺われた。また父親の中には「娘にこういう
経験をさせたい(具体的には母親からはなれ
て活動する経験)」という思いから、父親同
士の関係構築を働きかけ、取り組みを進めて
いた父親もいた。

さらに『人間関係の広がり』があげられた。
この人間関係の広がりには、保護者同士の関
係構築や父親とわが子以外の子どもとの関
係構築が含まれた。「(園の活動を通して感じ
る良さとして)保護者間のコミュニケーション。
やっぱり、これからずっと付き合ってい
かないといけない仲なので、少しでも会って
おいたら声掛け合いやすいし、頼み事とか相
談事だとかしやすしいし受けやすいって
いうことも考えたら、いろんな意味でいいこ
なのかな」「いつも僕の中での合言葉は『わ
が子と、わが子の友達のために』です。わが
子が育つためには、やっぱり友達みんなで育
たないといけないかなと思うので。なのでネ
ットワークを増やしたいなという部分があ
ります(その思いが人間関係の広がりにつな
がっている)」「うちの妻が客観的に言うん
ですよ。『あのお父さんは、ああいう方じゃ
なかったよね』と。『多分父親の会とかそう
いう場に出られて変わったんじゃないかな』
っていう話はほんとにしてたところで。(以
前は)他の子としゃべったりはしてなかった
よねって。でも今は僕とか以上にすごく丁寧
に優しく関わっておられる」などの語りがあ
った。わが子との関係に留まらず、園を介し
て保護者同士の関係や父親と他児との関係
が築かれていくことは、地域の人間関係づく
りが果たされているということであり、父親
を含めた地域の人間関係づくりを園が担う
ことのできる可能性が示された。

父親が園とつながる上での課題

父親が園とつながりをもつための『きっ
かけの重要性』があげられた。「(園の活動にあ
まり足の向かない父親の背景について)2つ
あると思って、物理的な問題(仕事の都合、
夜勤など)がありますよね。それは置いと
いて、じゃあどうして来られないのかなと思
うと、きっかけ(がないから)だと思います。
そのきっかけが1回じゃ足りない人もおられ

るかもしれないですけど、まあきっかけの
数が多ければ深みにはまれるんじゃないかな
と思いますね、いい意味で。そのきっかけも、
人それぞれでしょうけど。飲み会のきっ
かけがいい人もおれば、飲み会じゃない方が
いい人もおられる。園庭整備がいいのか、総
会みたいなものもいいのか、それはそれぞ
れかもしれないですけど。だからこそ、その
きっかけの数とか、その方法はいろいろあ
った方がいいのかなと思いますね」との
語りがあった。であげられた効果を実感す
るためには、父親自身が園とのつながりを
主体的に位置付けることが重要であると思
えられる。しかし、現実にはそのように
できる父親は少数派である。だからこそ、
まずは園とのつながりを築くための
きっかけが重要であるとの語りである。

また『社会的な状況への配慮』があげ
られた。具体的には母子家庭への配慮
である。父親が主体となって園で活動
したいという要望を出したところ、「園
はそういうのを作るのには否定的だ
ったんです。必要性を感じてない
っていうことで。その理由はや
っぱり母子家庭のお母さん方は
どうするのっていうふうな話
になって。別に母子家庭の子
どもが来てもOKだしって
いう考えなんですけど、そこ
はなかなかうまく園には(理
解してもらえず)やっぱり
そういうちょっとリスクある
ことはしたくないっていう形
だったので」というケース
があった。結局、園からは
独立した活動として展開され
たが、「ちょっと悲しかった
っていうか、本当は園と共
にやっていきたかったん
です」との語りがあった。
父親たちの思いが必ずしも
実現できるわけではなく、
一方で園という公的機関で
新たな取り組みを展開する
上では、社会的な状況に
どこまで配慮すべきかは
考えるべき課題として
あげられる。

(4) 父親支援に対する保育者の意識や専門
性について検討するにあたり、その前提とし
ての保護者支援における保育者の専門性
について、保育者を対象としたインタビュー
調査から検討した。その結果、保護者との
かわりにおける保育者の専門的力は、3
つの層からなる可能性が示唆された。

1つ目は『大人としての対人関係力』であ
った。保護者とのかわりには対大人との
かわりであり、大人としての対人関係力
について多く語られた。「(新任保育
者の様子を見て感じることをして)ひ
やひやするのがやっぱり社会人
になりたての言葉遣い」「(学生時
代に経験しておくべきこととして)敬
語をしっかり学んでおく」「(同)普
段から、保護者に対してというの
ではなく、大人に対して、何か自
分で伝えたいことだったり、大切
なことだったり言葉にして伝える
ということを意識しておく」な
どがあげられた。この力は、学
生時代に経験しておくべきこと
として語られることが多かった
ことから、比較的向

上させやすい力量として認識されていることが窺えた。

2 つ目は『大人としての対人関係力を支える素質』であった。敬語を身につけたり、対大人との言葉の遣り取りを経験するだけでは、保護者とかかわる上での専門的力量は十分ではなく、大人としての対人関係力を支える素質の必要性も語られた。「(管理職として担任教諭に求める力量として)おおらかさと忍耐強さかな。お母さんたちの言動一つ一つにカッカカッカ一緒になってる先生はまだまだだと思う。お母さんやお父さんが強くきたとしてもすごく冷静に、おおらかに。保護者対応はまず保護者目線に立てる人であり、おおらかというか親身になって相手の気持ちを受け入れる。そこがベースにないと上手くいかない」「(自身が意識的にしていることとして)保護者の方の特徴を素早くキャッチして、このお母さんはこちら側が聞いてあげるタイプのお母さんだなとか、幼稚園の子ども様子をたくさん聞きたい方なんだなとかっていうのを捉えてお話したりしています」などがあげられた。保育者の保護者とのかかわりは単に言葉のキャッチボールをするのではなく、感情の伴ったやりとりをすることが重要であり、そのために備えておくべき素質や能力のあることが窺えた。

3 つ目は『子どもの保育と連動させる力』であった。保護者とのかかわりは子どもの保育と不可分であり、子どもの保育と連動させて保護者とかかわっていく重要性が語られた。「保護者にではなく、子どもに一生懸命になっていたら、その気持ちは絶対に保護者に伝わる」「子どもの様子を見れているか見れていないかというのはすごく大きいと思うんです。子どもの様子を聞かれ、一日何をしていたのかなって、経験年数の浅いときって???がいっぱいあったと思うんですけど、今は自然と子どもたちのことを見る力が養われてきているので、きちんとお伝えできるかな」「今日、くん、こんな面白いことしてたから、お母さんに教えてあげようって楽しみになります」などがあげられた。教育要領・保育指針でも示されているように、保護者の幼児期の教育に関する理解が深まるように、子どもの保育と保護者とのかかわりを連動させていく力が保育者には求められていることが窺えた。

以上の内容は、広く保護者支援における保育者の専門的力量であり、父親支援においても当てはまる内容が得られた。

(5) 父親支援において役割が期待されている男性保育者に焦点をあて実施したインタビュー調査の結果について、男性保育者の父親支援に対する意識と課題について述べる。

男性保育者の父親支援に対する意識

まず『男性保育者が、父親が園とのつながりをもつ上での「窓口」としての役割を担っ

ている』という実感があげられた。「(園児の父親から)『やっぱ男の先生がおるだけで、ちょっと安心できる』という感じのことは言われたことがあって」「関わりどうこうじゃなくて(男性である)自分がその場所におるってだけで、いろいろ雰囲気とかも違ったり、保護者の方にも与えるものもちょっとは違うのかな」「お父さんがお迎えに来てくれたり、行事の参加率っていうのは少しずつ(増えている)でもここ5年ぐらい前からじゃないですかね。それこそ自分で言うのもあれだけど、僕が男として保育園に入って玄関にいたりとかするもんで、『男の先生おるから来やすくなった』っていうのは言ってもらえたことがあったので。一翼を担っているのかなとは思っていますけど。行事とかでもやっぱり僕が保護者会と一緒に協力してなんかやっとならなくても、当時(10~20年前)は女の人ばかりだったのに1人で汗かいてやってるのを見て、じゃあ手伝ってあげようかなっていう(父親)もあったみたいですし」などの語りがあった。(3) で、父親が園とつながりをもつためのきっかけの重要性が指摘されたが、そのきっかけの1つとして、男性保育者が人的環境として役割を担っていることが示された。

その一方で、『対父親と対母親で自身のかかわり方に基本的に違いはなく、同じ「保護者」としてのかかわりである』という姿勢について語られた。「(父母でかかわり方や意識に違いがあるかという問いに対して)全く一緒です。あくまで保護者として見ているだけです。普通にお父さんが来た、お母さんが来ただけで別に何も変わらないと思います」「お父さんやからってという関わりとかは、意識はそこまでしてないというか、やっぱり一保護者として、子どもの親として、男の人でも女の人でも、お母さんでもお父さんでも同じ意識というか、子どものことを一緒に考えられる保護者として(かかわっている)」などの語りがあった。上記した、父親にとっての「窓口」としての役割は意識しながらも、具体的なかかわりにおいては基本的に父母で違いを意識せず、同じ「保護者」として対応しているとのことだった。その理由として1人の保育者は「その親によってもやし、お父さん・お母さんによってもやけど態度が違うって1回指摘されて、平等な関わりに気を払わないといかんって思って。(指摘された当初は)なんでそんな平等にせなあかんかなとかって思っておったんですけど、やっぱり関わっていくうちに、人(父母)によって態度を変えておったら周りから見ても(いいようには捉えられないし)、自分もあんまり隔たりなく関わりたいなっていう(意識になってきた)」と語った。保育者という専門職として保護者とかかわる上で、父親に対する支援の必要性はあるものの、特に日常の直接的なかかわりにおいては父母を分けて捉えるのではなく、同じ「保護者」としてかかわ

ることが重要であることが窺われた。それが保護者支援における専門性の1つなのかもしれない。

ただし、『父親支援の具体的な内容に関しては特徴がある』ということも読みとれた。「保育参観にはお母さんだけが来られないけど、保育参加はお父さんだけが来られるっていうケースも多い。(その理由は)そこに遊びがあるからかな。保育参観は一方通行じゃないですか。子どもたちが僕の保育を受けているとか遊んでいるのを見るっていう。でも保育参加は一応趣旨としてもうたっていますし、『その日は一緒に保育パパ、保育ママとして、ぜひ遊んでください』っていうようなかたちで出すと、お父さんの参加も比較的、参観よりは多いなって」という語りや、「『子どもと遊ぶって、すごくハードルの低いことだよ』というか『自分の好きなことをすればいいだけです』っていうのが一応持論なので、ちょっと保育とはずれるのかもしれないですけど、『手をつないで歩くだけでいいんですよ』とか、例えばそういったことを僕は(特に父親に)伝えていきますね」という語りがあった。園における父親支援では、父親が取り組みやすい内容を設定することや、子どもとのかかわりを「大変なこと」と捉えるのではなく、小さな心がけから促していくことが重要であることが窺われた。

男性保育者が捉える父親支援の課題

父親支援に取り組む上での影響要因として、『園の雰囲気・施設長の意向』(「新たな取り組みをうちの園はできる環境だと。園長もどっちかという寛容なタイプなので」「女性しかいない園で父親の会があるっていうのはあんまり聞いたことはない」)、『自身の保育経験・力量』(「自分も経験積んで、それなりに子育てとかもしとったら、もっと積極的に声掛けて、父親同士の集まりとか企画したい」「自分もある程度長い年数働いてますんで、園長先生に伝えて、よっぽど突拍子もないことじゃない限りは大丈夫かな」)、『公立園の異動』(「私立とかそういう異動がないところやったら比較的、新しい行事っていうものを個人が企画することはできると思うんですけども、公立はその難しさがあるかな」)などがあげられた。現状では園において「新たな取り組み」という位置づけになる「父親支援」には、さまざまな調整が必要であることが窺われた。

一方で父親支援に継続的に取り組んでいる園においては『受け身的な父親の存在』があげられた。「(園に参画する父親が)増えてきたのはいいけど、今増えてきたからこそ中には、始めた頃は自分たちで『子どものためにやりたいから行こう』って言っていた人が、今はもう、『ほら、あそこのお父さんも行ってるからあなたも行って』みたいに(妻から言われて)参加するお父さんも増えてきたかな」という現状が語られた。父親がどのよう

な思いで園とのつながりをもっているかは様々である。その背景を理解しつつ、父親が主体的に参画できるように支援していくことが今後一層求められる。

また『父親支援だけでなく母親支援の必要性』もあげられた。「(父親支援を積極的に)してみたい気持ちはあるんですけど、してみたい気持ちと、あえてお父さんに固執しないといけないかっていう気持ちと。関わっていない親はお母さんでも関わっていないし、うちの園、お母さんの育児放棄っぽいところが見える家族が結構多くて、もうちょっとお母さん、子ども見てあげてよって思う」と語られた。どのような支援を優先すべきかは園や地域によって異なる。父親支援がどういった位置づけになるかは社会の状況や各地域の実情を反映することになるだろう。

(6) まとめ

以上の研究成果をまとめると、以下の3点となる。

父親が就学前保育施設とつながりをもつことが、「父親自身の楽しみ」「父子関係の深まり」「子どもを介した人間関係の広がり」につながっていた。

就学前保育施設における父親支援は、現状では「新たな取り組み」という位置づけが一般的であるため、支援を継続・展開していく上でさまざまな課題が生じていた。

さまざまな課題に向き合いつつ父親支援に取り組むためには、保育者の専門性の向上と合わせて男性保育者の普及が望まれた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

田辺昌吾・川村千恵子・畠中宗一、子育てにおける情緒的支援および情動的支援が父親のウェルビーイングに及ぼす影響、メンタルヘルスの社会学、査読有、20、pp.3-10、2014年

田辺昌吾・川村千恵子・畠中宗一、乳幼児をもつ父親のワークライフバランスとウェルビーイングとの関連、家庭教育研究所紀要、査読有、36、pp.31-39、2014年

[学会発表](計1件)

田辺昌吾、家庭と連携した保育を展開するための保育者の専門的力量、日本保育学会第67回大会、2014年5月17日、大阪総合保育大学(大阪府)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田辺 昌吾(TANABE Shogo)

四天王寺大学・教育学部・講師

研究者番号：00512831